

第12回

住まいと

コミュニティ

づくり

活動助成



活動地域：茨城県水戸市

概要：

当団体は、水戸市下市地域において、地域の大学、商店街、NPO支援センターなどと連携しながら、高齢者や車イスを使用する障害者など、地域に生活する誰もが楽しく安心して歩けるまちづくりを行うことを目的に活動しています。助成対象活動では、まちの回遊性を高めるために、狭い歩道のバリアフリー化のための立体植栽（街灯にハンギングで花鉢を飾る）を実施しました。具体的には、据え置き式の大形プランターの移動・撤去を進めながら、場所を提供する人、花を持ち寄る人、花を育てる人を募集し、500mの商店街の約70%の街灯に花鉢を取り付けました。また、寄せ植え教室を定期的で開催したり、地域の祭礼でコンテストを開催したりし、広く地域の理解・協力を得られるように心がけました。花の盛りの時期には自分のつくった花鉢を見にくる人も多く見られ、「まちの絆・ハンギングを用いたタウンモビリティ」という事業名にふさわしい成果が得られました。

〔下市タウンモビリティの会〕

- ・ 代表者：帯刀 治
- ・ 連絡担当者：新井 均
- ・ 連絡先：〒310-0815 茨城県水戸市本町3-2-25
- ・ TEL：029-221-3951
- ・ FAX：029-224-1802
- ・ E-mail：gift-arai@ams.odn.ne.jp
- ・ ホームページ：

1 団体の目的と経緯

目的：誰にでもやさしい、安全で歩いて暮らせる楽しいまちづくり

経緯：タウンモビリティのために設立された組織。商店街に回遊性を持たせるための活動を行っている。

高齢化と空洞化の進む水戸市の旧市内の下町、本町3丁目商店街を舞台に、商店街とボランティア(大学、NPO、大学生、小学生、行政)の人たちが、茨城県産の電動カートなどの新しい乗り物を使ったまちおこし(かえる・タウンモビリティ)を始めた。(下市は、徳川が佐竹を秋田に左遷し水戸に入ってきた時に湿地帯を埋め立てて新しく造った町人まち。戦前まで、住所を書くときに水戸市と各町名の間に上市(うわいち)、下市(しもいち)のどちらかを書き込まなければならなかった。また、昭和50年頃までは地形上から水戸駅や市役所のあった上市と常磐線の線路によって隔絶されていて、下市村と呼ばれていた。)

1998年(1999年に水戸下市タウンモビリティ実行委員会結成、2001年に下市タウンモビリティの会に名称変更)から誰にでもやさしい、“安全で歩いて暮らせる楽しいまち(商店街)づくり”のために、商店街はもとより、周辺地域の県道・市道のバリアチェックをして県や市の道路管理課への改善提言をしたり、スローライフにも通じるタウンモビリティの考え方や電動カートの普及をめざした試乗会を地元を始め、日立市などへも出向いて開いてきた。

2001年3月には、本町3丁目商店街の交流スペース「ふれあいひろば」に“かえる・タウンモビリティステーション”の常設運営を始め、電動カートや車椅子、ベビーカーの貸し出し、消耗の激しい電動カートのバッテリー相談などを行う。また同時進行で商店街のアメニティ性を高めるために、様々な角度で住民参加型の“まちづくり教室”筑波大学や茨城大学へ留学中の韓国や中国の人たちとの交流会、筑波技術短期大学の視聴覚障害の学生との交流会、



電動カートの試乗イベントにて

加齢・介護・リハビリなど高齢化対応の講演会から手づくり味噌やガーデニング教室まで)を開催してきた。その中で商店街のガーデニングは、商店街を歩く人に楽しんでもらえることや、タウンモビリティステーションの利用を1人でも増やすため、つまり商店街の回遊性を高めるために始められた。

NPO法人つくばアーバンガーデニングの協力を得て500m余の商店街に植栽を始めてから2年目、2.4mの幅しかない商店街の歩道は、植栽のプランターを増やすほど狭雑になり、私たちのめざしている安全で歩きやすいバリアフリーな商店街から遠ざかって行くことに気づかされた。そしてつくばアーバンガーデニングのガーデナーの人たちとの話し合いの中から、今回のハンギングバスケットによる“まちの絆事業”は生まれた。

据え置き式のプランターが当たり前の現在、商店街の歩道にはいろいろなプランターが置かれている。まちづくり教室の中で行ったバリアチェックでも指摘されていたが、一般の人がこれまで何ら疑問に思わなかった歩道上における植栽の現状を、“まちの絆事業”はガーデニングへの現在の関心度を逆手にとって、狭い歩道のバリアフリー化のために歩く人の目の高さの植栽へと、花々を見る人の目の角度を変えていこうとするものである。

2 活動の内容

街路灯へハンギングバスケットの設置
寄せ植え教室、寄せ植えコンテスト開催

商店街の2.4mしかない歩道を広く使い、安全性を増すというストリートハンギングを進める目的を商店街町内の人々に理解してもらい、据え置き式の大型プランターの移動や撤去を進め、商店街の各町内会で啓蒙活動も行った。

これまで行ってきた据え置き型プランターへの植栽でも、植えたばかりの花苗や蕾の開き出した花



商店街内の活動拠点“ふれあいひろば”

が心無い人に盗まれることがよくあったので、商店街の街路灯にハンギングバスケットを取りつけるための金具(当会の会員にステンレス板金の専門家がいたので、その工場で作成)は、盗難防止に一番気を配って作られた。一般から花の株主を募り、花の株主によって作られたハンギングバスケットを商店街の街路灯に取りつけ、商店街の人たちがそのハンギングの花々を育て、花の株主は育ち具合を見に商店街を訪れ回遊する“まちの絆事業”の実施が始まるわけだが、その前段階として商店街の通りにある50数本の街路灯すべてに安価なプランターを取りつけ植栽した。何故なら本町3丁目の商店街は商業集積の密な所ではなく、酒造工場あり、マンションや一般の住宅もありで今回の事業に関心の高い人たちがばかりではない。せっかく取りつけたバスケットに必ず水を遣ってもらわなくては困ってしまう。実際にその前実験の段階で商店街の真中の部分に水を遣ってもらえない所がでて来たので、その部分への取りつけは金具購入予算の都合もあり、2005年3月27日の最終部分で行われた。

6月に、つくばアーバンガーデニングのガーデナーの指導で、今回の助成金による10本分と商店街負担で5本分の計30個のハンギングを制作した。

9月に10本分20個、今年の3月に15本分30個を商店街の事業でつくり、40本の街路灯のポールにハンギングバスケットを取りつけ終わり、500mの商店街に連続した回遊性が完成した。

ハンギングバスケットや寄せ植え教室を6月、9月、11月、12月、1月、3月と定期的に関き、地元の祭礼時にはそのハンギングバスケットと寄せ植えのコンテストを開催して、広く地域の人たちに“まちの絆”の理解と花いっぱい商店街を楽しんでもらった。

12月から2月まで寒い時期よりも、やはり3月になってからの教室に参加者が多く、盛り上がった。



下市本町3丁目商店街

2005年3月27日の最終のハンギングづくりの会で、さらに15本の街路灯にもハンギングが取り付けられた。500m余の商店街の80%(合計40本)の街路灯にハンギングバスケットを取りつけることができ、植栽の連続性がほぼ完成し、商店街に回遊性が生まれた。実際に花の盛りの時期を迎え、自分の作ったバスケットの様子を見に来る人が増え、水やりに注文をつける人まで出てきた。

3 活動の成果

バリアフリーの普及

多目的交流サロンの開設

ストリートハンギングによる商店街歩道の街路灯への植栽と、歩道上に置かれたプランター等の整理による狭雑な商店街歩道のバリアフリー化が、ひとにやさしいまちづくりの一步という意識を、今回の事業参加者を通して広めることができた。そして近隣に稀なハンギングバスケットによる植栽の連続する商店街がつくられ、その注目度が高まることによって今回のまちづくりの意味が地域に循環的に拡大して行けば望む所である。

また、下市タウンモビリティの会としても、これまで電動カートや車椅子の貸し出しによるタウンモビリティの活動過程で生じた高齢者との意識のずれ(高齢者の活動範囲を広げる簡便な乗り物貸し出しというより、どちらかという身体障害者の利用するような乗り物を一方的に勧めるように見られてしまうギャップ)が大きかったので、今回の事業を通して別な方角から問題を見直すことができたと思う。

空き店舗を利用した多目的交流サロンのオープン企画のことも、なかなか水遣りをしてくれないブロックに、幸か不幸かタイミングよく築45年と古い大きな空き店舗ができてしまったので、何とか駐車場にされないうちにと家主に交渉した結果、格安な家賃で借りることができた。まず家主に了解を取



商店街の街路灯に設置されたハンギングバスケット

りつけ借りてしまってから、どのように会の活動を展開していけるか話し合いを続けた。今年の2月から4月に至るこの過程で、2～3年前の会の賑わいが戻りつつあり、そこでは以前から問題になっていたタウンモビリティという会の名称変更を含めた活動内容の再確認が行われることになるだろう。

そしてそこでは、コミュニティビジネスや絵本図書館（子育て支援）といった活動の対象を、高齢者や団塊の世代から子育て中の若いお母さんと子ども、小中高生まで巻き込んでの展開へとステップアップして行く事ができそうである。

4 今後の取り組み

ストリートハンギングを利用した“まちの絆”事業は、多目的交流サロンの中に“まちの楽校”のメニューの一つとして継続される。

子育て支援機能と絵本・児童書の図書スペースをもった多目的交流サロンをキーステーションとした、下市本町・浜田地区のすべてのひとにやさしいまちづくり、地域の歴史や伝統文化を踏まえ、それらを子どもたちの未来へつないでゆく作業を、多世代間の交流を通して実現していく取り組みを始める。

その施設は、下市タウンモビリティの会としての資金的な制約もあり、できるだけ手作りで、上記の取り組みに必要な設備や人員を、できる所からできる範囲で整えていく。



寄せ植えコンテストの作品展



寄せ植え教室に参加した住民